巻頭言

科学者精神—ひたむきさと謙虚さと

御園生　誠　Makoto MISONO
東京大学名誉教授

「科学者精神」の根底には，科学者の科学に対するひたむきさと自然に対する謙虚さがある。そして，科学の進歩には，静かに研究を遂行する十分な時間が欠かせない。しかし，科学に対する社会の期待を考えると，科学者はゆっくりもしていられない。

20 世紀以降，科学と社会の関係（あるいは個人と国家の関係）は，粗密の程度も対抗軸も変わった。例えば，世界大戦時と米ソ冷戦時に，科学者は国家目標（軍事研究）に総動員された。他方，第一次世界大戦後，時代に揺れる若い科学者たちに，仕事に戻り科学に専念せよと言ったのは，ウェーバーの有名な講演『職業としての学問』である。また，プランクは，社会と距離を置いた科学者コミュニティーの育成に尽力した。振り返ってみると，科学と社会の関係は，20〜30 年周期で社会とともに大きく変動した。

いま，我が国の科学の「停滞」が国内外から指摘されている。20 年余り前から科学技術基本計画が強力に推進され，その成果がそれなりに上がっていると思っていたので，「停滞」とは意外である。その上，近年，基本計画の影の部分が目立つ。いったい基本計画の方針に問題があったのか，研究投資の仕方に問題があったのか，それとも社会環境が変わって当初の計画が時代に合わなくなったのか，しっかり過去を総括した上で，将来計画を立てるべきであろう。なお，目立つ影の部分とは，激減した正味の研究時間，不安定・従属的雇用の増加，誇大宣伝・研究ポピュリズムの横行（政治に並行），研究不正の多発（功名心に謙虚さが座屈）などである。

科学の停滞に対し，制度の改革，研究費の見直しが提案されているが，それだけで解決できるであろうか。皆が皆（特に優秀な研究者が皆），与えられた研究目標に向かってわき目もふらず走り続けている（ように見える）現状がいいとは思えない。むしろ，研究者一人ひとりが，科学にじっくり向き合って自らなすべきことを考え，それをひたむきに追及することが，実りある科学の基盤を築くために必要なのではないか。友人の生命科学者は，とりわけ若手の育成に課題があり，若者が将来に夢を持って学術に励める良い環境を醸成すべきだという。若者にとっての良い環境とは，良い教師，先輩に囲まれ，研究費にそれほど苦労せず，研究テーマを自ら選べる環境である。

科学と社会の開かれた関係，社会に役立つ研究，競争的研究の概念は，この 20 年間で浸透した。それは良いことであったが，いまや，停滞とひずみが目立つようになった。そろそろ新時代にふさわしい大転換が必要なのではないだろうか。

© 2017 The Chemical Society of Japan